

地質54 溶結凝灰岩～鹿児島の歴史とともに～ 地質担当 若松 斉昭

現在開催中の企画展「石の名は？」では、街なかで見られる石材について取り上げています。なかでも鹿児島で古くから活用され、採石地の名前を冠して呼ばれて親しまれてきた溶結凝灰岩については、特に大きく取り上げています。そもそもなぜ鹿児島には多様な溶結凝灰岩が多く分布するのでしょうか。それは鹿児島ならではの地質が関係しています。南九州には過去に巨大噴火を起こした痕跡であるカルデラが4つもあり、北から加久藤カルデラ、始良カルデラ、阿多カルデラ、鬼界カルデラと呼ばれています。



南九州のカルデラ

それぞれの巨大噴火で大規模な火砕流が発生し、マグマの成分や噴出源からの距離の違いなどによって、鹿児島県内各地で特徴の異なる溶結凝灰岩が形成されました。

今回は、企画展で写真として展示したものの、詳しく取り上げることができなかった霧島市の「隼人塚」と、始良市の「山田の凱旋門」について解説してみたいと思います。

隼人塚

霧島市隼人町にある隼人塚は、同じく霧島市にある大隅国分寺跡とともに、県内最初の国指定史跡として大正10年に指定されました。今から1000年ほど前の平安時代後期の建造物



隼人塚（霧島市）

と見られており、五重石塔3基と四天王石像4体が立っています。建立については「殺されたクマソ・隼人の霊を慰めるために建てられた」とか「正国寺という寺の跡」などの諸説あるそうです。

この隼人塚の石材は、霧島市国分周辺に分布する、約5万年前に始良カルデラ付近から噴出した岩戸火砕流の溶結凝灰岩で、天降川の流域で採石されたと考えられています。岩戸火砕流は「スコリア」と呼ばれる黒い軽石を含むのが特徴ですのでよく観察してみてください。塚は平成10年から11年にかけて出土した石材をもとに復元されましたが、仁王像の台座にはおそらく出土品ではない、阿蘇4火砕流の溶結凝灰岩と思われる石材が使われています。色や含まれる鉱物などを石塔本体の石材と比較してみると面白いと思います。

山田の凱旋門

明治37～38年、日露戦争に従軍した当時の山田村の人たちの無事帰還を記念して、明治39年（1906年）3月に建設されました。



山田の凱旋門（始良市）

日本に現存するアーチ型凱旋門は、静岡県浜松市引佐町のもの合わせて2つだけという、とても珍しいものです。平成13年に国の登録有形民俗文化財に登録されました。静岡県の凱旋門は煉瓦造りですが、山田の凱旋門は加久藤火砕流の溶結凝灰岩で作られています。風雨にさらされて内部構造はわかりにくいですが、アーチの下は雨が当たらないため比較的きれいです。門をくぐる際に溶結凝灰岩に含まれる軽石などを観察してみてください。

今回取り上げたもの以外にも、溶結凝灰岩でできた建造物や石塔などが県内には数多く残っています。皆さんの身近にある溶結凝灰岩をぜひ探してみてください。